

「内なる大陸」を描くために 論文要旨

李泊衡

令和6年度 東京藝術大学 大学院 美術研究科 博士後期課程 学位論文 要旨

本研究では、こうした東洋化のプロセスによって、自身の文化的特徴を保ちながら西洋芸術のエッセンスを吸収して形成する、時代感覚と国際性を兼ね備えた絵画空間を「内なる大陸」と呼ぶ。「内なる大陸」を描くとは、絵画において地域や文化の境界を超え、東洋と西洋の芸術の精髓を融合し、新たな視覚言語と芸術スタイルを創り出すことを意味する。具体的には西洋芸術の写実的な技法と豊かな色彩表現に、水墨画の簡素・静寂・自然の美や中国の哲学思想を融合することで、現代的な芸術スタイルを創り出していく。

同時に、「内なる大陸」とは比較文化論にとどまらない、人間の内面に深く根ざした感情や思想を指し、具体的な地域を超越する精神の領域でもありたい。人間の内面世界を示すイメージは、西洋絵画の古典技法の特徴である。本研究はこの絵画空間の創造を通して、特定の文化的背景に限定されない、人類共通の感情や体験の表出と相互理解を目指す。

このように、本研究が求める「内なる大陸」とは集団と個人の両方にある広大で自由な世界である。この大陸を描くには、自分自身の内面世界（感情・思想・潜在意識・アイデンティティ）を深く見つめる必要がある。そのため本研究では「夢」に焦点を当てた思索と実験を行い、そのプロセスは以下1～3の章立てにそって記述していく。

第1章「夢とは何か ～集団的無意識を探る～」では、フロイトとユングによる夢の分類を自作分析のために整理し、これを物差しにして筆者のこれまでの絵画制作の歩みを振り返った。また、筆者はこれまで個人的な体験・創作として夢を描いてきたが、ユングによる「元型と象徴」の理論によって、夢や潜在意識が他者とつながることが可能な領域でもあることがわかった。この個人から集団へ無意識下で行われるイメージの伝播と視点の変容については、「百匹目の猿現象」や「胡蝶の夢」を補完的に参照し、「内なる大陸」を描く手がかりとした。

第2章「描かれた夢 ～絵画史において夢はどのように描かれてきたか～」では、精神分析学が絵画芸術に与えた影響についてリサーチした。フロイトの夢分析はシュルレアリスム運動の理論的基盤となり、その後「集合的無意識」の概念を提唱したユングの理論は、筆者が傾倒するウィーン幻想派の画家たちに深い影響を与えるなど、夢というアプローチ

が美術史上の画家たちに豊富な創作インスピレーションと実験の余地を提供してきたことがわかった。特にウィーン幻想派が北方マニエリスムの持つ幻想性と融合して生み出した内省的で緻密な絵画群は、油彩の古典技法を研究する用いる筆者にとっておおいに参考になった。

また、この章では映画「インセプション」や能楽「清経」など、他領域において夢・潜在意識・幻想を構造的に描いた優れた作品を参照し、古典技法の絵画でありながら没入感ある鑑賞体験をつくるための示唆を求めた。

第3章「制作ノートから ～内なる大陸を描き・展示する～」では、自作絵画にインスピレーションを与えた筆者の夢体験を3タイプに分類し、本研究が描こうとする「内なる大陸」(=潜在意識)の、絵画空間における多様かつ重層的な展開の可能性を明らかにした。また、本研究で用いる絵画技法や材料、展示や鑑賞におけるコミュニケーションについても本論に合わせて再考察し、特に技法については、中国画の「暈染」を取り入れることで、東洋人の筆者が西洋の古典技法で描くことで生じてきたズレを解消し、(西洋でも東洋でもない)「内なる大陸」を描くための手法を獲得することができた。

以上、絵画制作と並行して進めてきた1～3章のリサーチと分析を通じて、文化的・地理的・政治的境界を超える絵画空間=「内なる大陸」をいかにして描くかという本研究の問いは、着想法と技法、美術史との接続、鑑賞方法の開発において一定の解に至ることができたと考えている。



図 35 | 「白昼夢 ～バタフライエフェクト」 李泊衡/2015～2023 年/パネルに油彩、天竺綿/530×530×30 mm

現時点で、筆者がイメージする「内なる大陸」を最も具現化している作品は、図 35 の「白昼夢 ～バタフライエフェクト」である。「バタフライエフェクト」とは、蝶の羽ばたきのような力学系のわずかな攪乱が、その後の大きな変化につながるという寓意的な言葉である。2章で取り上げた中国の故事「胡蝶の夢」にも登場するように、蝶は洋の東西を問わず、時空をこえ、現実と幻想、個人と世界、過去と未来をつなぐシンボルであり元型である。

前項の対話サンプルで取り上げたように、この作品はルーブル美術館で「横たわるオダリスク」を模写しながら筆者が見た夢からインスピレーションを得ており、その背景には失恋という極めて個人的な体験があるが、一個人の潜在意識から取り出されたシンボルが、美術館・美術史という公的かつ歴史的な文脈に拡大・転移されている点で、本研究が求める「内なる大陸」へのアプローチを明快に示していると言えよう。

本研究では、筆者自身の夢と潜在意識をプラットフォームに、写実絵画の実践において西洋と東洋の融合を試みてきた。その融合の先に筆者が創造したい「内なる大陸」とは、地域と文化を超えた普遍的でグローバルなアートの在処であり、独自の視覚体験の開発である。

本論の展開は「白昼夢 ～バタフライエフェクト」が図示している通り、筆者個人のアイデンティティに依拠した芸術論・制作ノートの域を出ていないが、グローバル化の一方で分断と格差が進む世界において写実絵画に残された可能性の入口を示すことができたと考えている。人間の集合的無意識こそ、人類に残された最後の未到大陸であり、そこに医療や生態学ではなく芸術の領域から至ろうというのが、本研究の道筋であり、「内なる大陸」を夢見る探求は道半ばなのである。